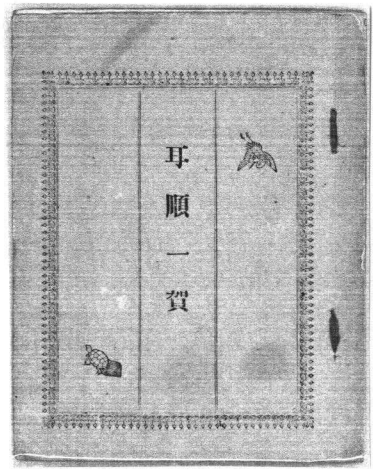
宇都宮默霖（うつのみやもくりん）　僧侶、のち神官。文政七年八月安藝國生れ、明治三十年九月十五日歿（一八二四―九七）。講雄綱、字梅溪、幼名糸女、文雄、綱夫、道稱眞名介、僧名覺了。別號史狂王民、觀海舍主人、雪溪、鶴梁。幕末に活躍した代表的勤皇僧の一人。慶應二年還俗。維新後は湊川神社等で神官。明治八年頃生地長濱に歸住。十年間を費して一切經全部を國風（くにぶう）と以て和譯、その樹百八十餘卷に達し、更に「日本詩經豐藻」を始め還俗以後の著述凡そ六十種に及ぶといふ。また還暦記念として自作漢詩「省藝集」四卷を『耳順一賀』（源雄綱名、明治二十年一月序、廣島・安藝活版所刊行）と題して上梓した。

『宇都宮眞名介先生小傳』（大正四年八月七日小田豐登編刊）、吉野浩二著『默霖に於ける吉道實踐』（昭和十六年九月二十八日日聖書店「東洋文化叢書」）、知切光歳著『宇都宮默霖』（昭和十七年六月二十日日本電報通信社出版部「郷土偉人傳選書」）等の他、川上喜蔵（きぞう）編著『宇都宮默霖吉田松陰往復書翰』（昭和四十七年七月二十日錦正社「国学研究叢書」）がある。